

シュメール語の動詞複数語基について

森 若 葉

はじめに

本稿ではシュメール語¹⁾動詞の複数語基を扱う。シュメール語において複数性の表示は義務的ではないが、複数性を表すいくつかの方法があり²⁾、動詞の複数表現については三通りの方法があることが知られている。そのうちの一つが本稿で中心的に扱う複数語基（複数のための補充的な語基）を使う方法である。第二に *hamtu*³⁾ reduplication（動詞語根の重複）によるもの、第三に動詞の人称接尾辞による複数性の表示がある。これら三通りの方法は組み合わせて用いられることもある。

従来の研究においては、複数語基と *hamtu* reduplication はともに絶対格名詞の複数性を示すとの見方が一般的である。Steinkeller 1979 によると自動詞主語と他動詞目的語の複数性は複数語基か動詞の重複によって表示される。また動詞の人称接尾辞については、本稿では三人称複数有生接尾辞の {eš} と {ne} の二形式を扱う。この {eš} と {ne} はアスペクトに

-
- 1) シュメール語は古代メソポタミアの言語である。粘土板を中心に十万点を越える資料が発見されており、紀元前 2600 年頃から紀元後 1 世紀にいたるまで、量、種類ともに豊富な資料が現存する。楔形文字で記され、膠着語の特徴がみられる。系統関係は不明で、メソポタミア南部で共存関係にあったセム系民族の言語との接触による影響がみられる。前 2000 年頃からシュメール語が口語として使われなくなるにしたがい、後期の文献はセム系のアッカド語を中心とする他言語を母語とする書記によって記された可能性が高い。本稿では複数語基の时期的相違をみるために、前 2500 年頃から前二千年期までの資料を扱う。資料はおおきく初期王朝期前 2500 年頃から前 2350 年頃)、アッカド期 (前 2350 年頃から前 2200 年頃)、Ur III 期 (前 2200 年頃から前 2000 年頃)、前二千年期 (前 2000 年以降) に分けて示す。ただしこれらシュメール語資料の種類は時期によって偏りがある。Ur III 期以前は行政経済文書が中心であり、前二千年期はそのほとんどが文学作品である。
 - 2) 名詞においては、名詞を重複させることによって全体的、集合的な複数性を表すとされる方法と、有生クラスの名詞について複数接辞 {ene} を後続させる方法がある。シュメール語では動詞の複数表示と名詞の複数表示は一文中で一致してあらわれるものではない。
 - 3) *hamtu* は、シュメール語を記述するために用いられる文法述語である。*hamtu* は perfective アスペクトを表す。対立する *marû* は imperfective アスペクトを表す。*hamtu* は基本的に語根と同一形式である。*marû* (imperfective) 形式の形成法は 1. 語根に -e を付す。2. 語根を繰り返す。3. 補充法の三つのタイプがある。1 のタイプが最も多く、どの形成法をとるかは、動詞ごとに傾向がある。

よって分布が異なり、基本的に有生クラスの名詞について主語か目的語に一致するといわれる。

本稿では複数語基の形式を時期に分けて整理し、先行研究の問題点を指摘する。複数語基と三人称複数接尾辞がそれぞれ別の複数性にかかわる例を示し、それらの複数性が異なるものであることを論ずる。そして複数語基の時期的な特徴を記述する。

複数語基には {durun}「住む、座る」(対応する単数形式は {tuš}), 以下同様), {sug}「立つ」({gub}), {sub}/ {ere}「行く」({gin}), {lah}「連れる、運ぶ」({tum}), {se}「生きる、いる」({ti})がある⁴⁾。これらの動詞はバビロニア人によって「複数」⁵⁾として扱われる。ただし複数性の表示が義務的ではないため、対応する複数語基が存在する場合でも、単数の動詞が用いられることもある。

Steinkeller 1979をはじめとし、複数語基の複数性はつねに絶対格名詞句に関わるという説が一般的である⁶⁾。これに対し、本稿では複数語基の複数性はそれぞれの複数語基ごとに

4) 他に複数語基として議論されるものを以下にあげる。

{e}「言う」[dug₄(sg)] [Edzard 1966; Thomsen 1984], {sun} (sun₅)「入る」[ku₄(sg)] [Civil, AS 20(1975: 150, n. 44)], {ug} [ug₅(ŠIR₃×UŠ₂)/ ug₇(UŠ₂)「死ぬ、殺す」(Steinkeller 1979によると [uš₂(sg)]との対立はOB期に不明確になる。) [Steinkeller 1979; Thomsen 1984], {be} [be₃(BA.BA)]「配る」[ba(sg)] [Sollberger, JCS 10 (1956), Edzard, ZA 66 (1976)]。さらに目的語の複数性に関して ra が DU と交替するとの J. Bauer, WO 6 (1971) の議論があるが本稿では扱っていない。

このうち {e}「言う」を複数語基とすることには否定的である。{e}を複数形式とする根拠は、hamtu であらわれるとされる三人称複数接尾辞 {eš} が {e} に後続することによると思われる。Thomsen は {e} を複数語基として、{e} が他の複数語基と異なる振る舞いをすると述べる。しかしながら {e} は dug₄ の marū 形式であるため、marū の動詞形式にあらわれる三人称複数接尾辞 {ne} も当然後続する。後述するが他の複数語基に {ne} が後続することはなく、また {eš} が marū でも用いられる可能性が高いため、{e}を複数語基とする根拠は不十分である。{e}の例については Attinger 1993 が網羅的に扱っている。

また「入る」という意味での {sun} については以下のような例がみられるが、Sargon Legend や Bird and Fish 57; 93 では単数に用いられる。用例も限られているため、本稿では複数語基としていない。{ug} {be} については今回扱えなかった。

◇Lugalbanda I 136 [ETCSL 1. 8. 2. 1] (類例: 同49) (前二千年紀)

šeš-gal-šeš-gal-lugal-ban₃-da kur-ra ba-an-sun₅-ne-eš

◇Lahar and Ashnan 60-62 [Alster and Vanstiphout, ASJ 7 (1987)] (前二千年紀)

u₃-mu-un-sun₅-ne-eš he₂-gal₂ mu-da-an-gal₂-le-eš min₂-na-ne-ne ki gir₃-ne-ne ba-an-gub-bu-uš-a dugud-bi e₂-a nig₂ dah-e-me-eš

◇Cooper and Heimpel, The Sumerian Sargon Legend, 3N T296 obv. 17-18 [JAOS 103 (1983)] (前二千年紀) (単数の例)

lugal-ra ki ku₃-ga-ni-še₃ im-ma-da-an-「sun₅」-ne-eš

ṁšar-ru-um-ki-in ki^dur-^dza-ba₄-b^aa₄-še₃ im-ma^l-da-an-sun₅-ne

5) 新バビロニア文法テキスト (NBGT) に DIŠ (単数) と対立して MEŠ (複数) と説明される。例文 (1) を参照。

6) シュメール語は基本的に能格型言語である。アスペクトによる split ergative がみられるという説をとる研究者が多い。一般的傾向として hamtu アスペクト (perfective) において、自動詞⁷

意味的に特定の項に関与するとの見方をとる。

複数語基と他の複数表示との共起関係については、有生物が複数である場合、動詞によって差はあるが、三人称複数接尾辞(eš)を伴う傾向にある。また複数語基は重複しうることが指摘されている。

以下の I から VI においてそれぞれの複数語基について考察を行う。

I {durun} 「住む, 座る」

tuš(TUŠ)「座る, 住む(単数)」に対応する複数語基である。表記の方法は初期王朝期からアッカド期が $\text{durun}_x(\text{TUŠ.TUŠ})^7)$, Ur III 期は $\text{du}_2\text{-ru-un}$, 後期(前二千年紀)は主として $\text{dur}_2(\text{TUŠ})\text{-ru-un}$ が使われる。

前一千年紀にバビロニア人によって作成された新バビロニア文法テキスト(NBGT)では tuš と $\text{dur}_2\text{-ru-un}$ がともに $a\text{-šab}$ 「座る, 住む」を意味し, それぞれ単数(DIŠ), hamtu と, 複数(MEŠ), 「 hamtu と marû 」であると記される。MIN は「上記に同じ」ことを示す。

(1) NBGT II 11-12[MSL IV, 148-149]⁸⁾

$\text{tu-usTUŠ} = a\text{-šab DIŠ } ha\text{-am-tu}_2$ 「座る, 住む 単数 hamtu 」

$\text{dur}_2\text{-ru-un} = \text{MIN MEŠ } ha\text{-am-tu}_2 \text{ u } ma\text{-ru-u}_2$ 「座る, 住む 複数 hamtu と marû 」

以下の例文で統語的にどのような関係であるかにかかわらず, {durun}の複数性は「座すもの」に関与することを確認する。

1 有生物の複数性を表示する {durun}

「座る, 住む」を意味する複数語基 {durun} が有生物の複数性を表示する例をあげる。シュメール語の名詞は有生クラスと無生クラスに分けられる。有生クラスに属するのは人あるいは神, 無生クラスに属するのは人と神以外の動物を含む全ての事物である⁹⁾。有生物の

↙ 主語と他動詞目的語が, marû アスペクト(imperfective)において, 自動詞主語と他動詞主語が動詞の人称接尾辞としてあらわれうる。

7) Ur III 期より古いテキストについてはほぼ規則的に $\text{durun.durun}(\text{TUŠ.TUŠ})$ があらわれることから, Steinkeller 1979: 55, n. 6 が durun_x の読みを提案している。

8) 以下の例文において斜体字はアッカド語であることを示す。大文字の翻字は, シュメール語においては読みが確定しないサインの代表的音価を, アッカド語テキストにおいてはシュメール語のイデオグラムをあらわす。右下の数字は同音異綴のサインを区別するための番号であり, 左右肩の文字はサインの読み(の一部)もしくはその語の種類を示す限定詞である。[] はテキスト欠損部の補いを, 「」は文字が一部欠けていることを, x は一つのサインが読めない状態にあることを示す。

9) シュメール語の名詞クラスは伝統的に有生クラス(animate)と無生クラス(inanimate)に分けられる。この用語は動物が無生に含まれることから不適切であり, 人間クラス(human): 非人間クラス(non-human)とする方がより正確であるが, 本稿では伝統的用語法に従っている。

場合は {durun} 「座る」の動作主の複数性を示す。例文(4)では6行目と12行目は主語が単数で ab-tuš(TUŠ)とあらわれる。初期王朝期の段階では、「座る」の複数語基は durun_x(TUŠ.TUŠ)と TUŠ を横に並べて書く¹⁰⁾。

- (2) *Nik* I 10: 2 (類例: i₃-durun_x(TUŠ.TUŠ)-eš₂ [*DP* 612: v 3])(初期王朝期)
 /420人/¹¹⁾ NINA^{ki}-na durun_x(TUŠ.TUŠ)-na-me
 420人はNINAに住むものたちである。
- (3) *ITT* I 363: 7-9 (類例: i₃-durun_x(TUŠ.TUŠ)-ne₂-eš₂ [*ITT* I, 1182: 11; 1436: 8; 1463: 15])
 (アッカド期)
 dumu-šuruppag^{ki}-me lagaš^{ki}-a!(ME) ib₂-durun_x(TUŠ.TUŠ)-ne₂-eš₂
 彼らはシュルツパクのものたちである。彼らはラガシュに住んだ。
- (4) *ITT* I 1100: 15 (アッカド期)
 dumu-nibru^{ki}-me lagaš^{ki}-a ab-durun_x(TUŠ.TUŠ)-ne₂-eš₂
 彼らはニブルのものたちである。彼らはラガシュに住んだ。
- (5) Sollberger, *TCS* I 6: 6 (アッカド期)
 [i₃]-durun_x(TUŠ.TUŠ)-eš₂
 彼らは住んだ。
- (6) *TCS* I 203: 1-4 (Fish, *MCS*, 3 p. 1, No. 1)(=吉川 1979: 685)(Ur III期)
 sukkal-mah-ra u₃-na-a-du₁₁ di-ku₅ ib-du₂-ru-ne₂-eš u₃ a-ne ib-gub
 宮宰に言え。判事達は着席した。そして彼は立った。
- (7) Falkenstein, *NG* 214: 41 (*TCL* V 6047: 41)(Ur III期)
 /複数の奴隷/ ki-dam-a-ne-a-ti-ka i₃-du₂-ru-ne₂-ša-am₃
 複数の奴隷たちが Ane'ati の妻のところにおいた。
- (8) Hallo, *The Royal Correspondence of Larsa III* (1991) 1. 30 (前二千年紀)
 nu-sig₂ nu-mu-un-zu-bi-še₃ u₂-a lu-lu-a mu-un-gar u₂-sal mu-un-TUŠ-ru-un-
 ne-eš
 孤児と未亡人を青々と茂った草においた。彼らは柔らかな[?]草に住んだ。
- (9) Cavigneaux et Al-Rawi, *Gilgameš et la mort*, Meturan 193 (M₂ iv)(前二千年紀)
 [IG.LD]U.UN ki-sig ^da-nun-ke₄-ne dingir gal-gal-ne TUŠ-ru-na-b[a[?]]
 偉大なる神々、Anunna の神々が住まう墓所に……。
- (10) Ali, *Sumerian Letters* B: 20, 5-6 (前二千年紀)

10) Fara 文書では複数語基と考えられる TUŠ.TUŠ や DU.DU のサインについて、TUŠ や DU を横に並べたものと縦に並べたものの両方がみられる。Fara 文書やそれに類するテキストについては、資料の読み書きの方向の問題もあり、本稿では考察の対象としない。

11) / / は例文を簡略化したことを示す。

- lu₂-tur igi-zu-še₃ al-TUŠ-un-na e₂-dub-ba-a-ta na-ab-ta-e₃-en
あなたの前に座る若い人達を、あなたは学校から出してはならない。
- (11) Berlin, *Enmerkar and Ensuhešdanna* 217 (前二千年紀)
sahar-hub₂-sahar-hub₂-ba ba-an-TUŠ-ru-ne-eš ^dutu an-ta i-im-gi₄-gi₄-ne
彼らは埃にまみれて座った。彼らは Utu 神に相談に行く。
- (12) Ur-Nammu A 82 [Flückiger-Hawker, *OBO* 166] (前二千年紀)
ur-^dnammu gišbun-gal-gal-la ba-ši-in-TUŠ-ru-ne-eš
Urnammu 王が彼らを大きな宴に座らせた。
- (13) Alster, *PAS* 8. Sec. B2 (前二千年紀)
megida₂ (text: KUN) u₂-gu-de₂-a-ta i₃-TUŠ-ru-ne¹²⁾ e₂(!) ir-^rda¹ mu(!)-un-kal-
la-ge-ne
Alster: while they were waiting for the sow that had disappeared they strengthened the
piggery.
- (14) Hallo, *The Royal Correspondence of Larsa III* (1991) 1.48 (前二千年紀)
ir₂ a-nir-ra-zu ga₂ im-ma-an-šir₃ ga₂-ra im-ma-an-TUŠ-ru
私はあなたの哀歌を歌う。私のために彼らは座るだろうか？
- (15) Lugalbanda I 373-374 [ETCSL 1.8.2.1] (類例: Cohen, *ELA* 21 nu-mu-un-TUŠ-ru) (前二千年紀)
an ^den-lil₂ <^den-ki> ^dnin-hur-sag-ga₂-ke₄ si-dug₄-ta gišbun-na im-ma-ni-in-TUŠ-ru
An 神, Enlil 神, Enki 神, Ninhursag 神は穴のところで宴会の席についていた。
- (16) Alster, *PAS* 6.50 (Ni 1300 o.13) (前二千年紀)
[a-ba-a]_{m3} šir₃-e TUŠ-TUŠ-ru-da mu-un-[...]
Alster: Who [sailed(?) it] while singing a song?
- (17) Kramer, *BASOR* ss. 1.220 (=吉川 1979: 685) (前二千年紀)
im-mi-in-TUŠ-TUŠ-ru-ne-eš
彼らは座った。
- (18) Michalowski, *Royal Correspondence* 21 (Puzur-Šulgi to Ibbi-Sin) 1.22 (前二千年紀)
gi₆-par-ra ne-ne-a ga-ib₂-TUŠ-TUŠ (var. ga-bi₂-ib-TUŠ-ru-TUŠ)
Gipar に私は彼らを住ませる。
- (19) Enki et Ninhursaga 220 [Attinger, *ZA* 74] (前二千年紀)
^da-nun-na-ke₄-ne sahar-ta im-mi-in-TUŠ-TUŠ-ne-eš

12) 三人称複数接尾辞 {ne} が後続する形式とも取れるが、複数語基に {ne} が後述する例はほかに例がなく、n までが語基であると考えられる。

Anunna 達は砂の中に座った。

n が後続する、すなわち *durun* の読みが明確な場合¹³⁾、初期王朝期には規則的に TUŠ サインを並べて書くことから、この時期の表記は *durun* の重複としてではなく、TUŠ.TUŠ で一つの形式 (*durun_x*) ととらえる方が適切である。Ur III 期は *du₂-ru-un* と分かち書きであり¹⁴⁾、後期文学作品における {*durun*} の表記法は TUŠ サインが用いられるが、複雑である。TUŠ-*ru.n* の表記が圧倒的に多いが、TUŠ のあとに n が続く場合もある。上例から後期における複数語基 {*durun*} である可能性が考えられる形式をまとめると、次のようになる。

[後期の {*durun*} の形式]

(TUŠ- <i>ru</i>	(15))	(TUŠ-TUŠ- <i>ru</i>	(16))
TUŠ- <i>ru.(u)n</i>	(8)(9)(11)(12)(13)	TUŠ-TUŠ- <i>ru.(u)n</i>	(17)
TUŠ- <i>un</i>	(10)	(TUŠ- <i>ru</i> -TUŠ	(18))
TUŠ. <i>n</i>	(14)	TUŠ-TUŠ. <i>n</i>	(19)

後期の {*durun*} の形式は TUŠ.*n* もしくは TUŠ-*ru.n* で読みは *duru(n)* が想定される¹⁵⁾。また (16) の例は -*da* の前に用いられ、*marû* 形式と考えられる。TUŠ.TUŠ については、その意味機能が問題になるが、初期王朝期のように *durun_x* とするのではなく、複数語基 {*durun*} の重複と考える。末尾の n については、後期は基本的に後続要素がない場合、n を表記せず、後続要素がある場合は n を書き表す傾向にあるといえる。これらの {*durun*} の表記については次の 2 節における {*durun*} の複数性が無生物に関与する場合でも同じ傾向がみられる。

三人称複数有生接尾辞の {*eš*} は分かち書きもみられるが、Ur III 期までは基本的に -*eš₂* と表記され、その後 -*eš* に変化する。{*eš*} は *hamtu* 形式に後続するとの見方が一般的であるが、本稿では *marû* 形式にも後続するとの見方をとる。これについては III の 3 で述べる。有生物についてはその文が自動詞的であれ、使役的であれ、{*durun*} は「座すもの」の複数性に関与する。(12) や (18) のような使役的な文で複数語基が他動詞主語の複数性を表す例はみられない。

2 無生物の複数性を表示する {*durun*}

{*durun*} が無生物の複数性を示す場合である。以下のように「座すもの」が動物や事物など無生物の場合はふつう複数語基に {*eš*} が後続しない¹⁶⁾。「座らせる人」や「おく人」の複

13) r があらわれない (15), (16), (18) のような形式については、単数 *marû* の形式として *dur₂* を考える場合、複数語基ではない可能性がある。Steinkeller 1979: 55 n.6 を参照。

14) Šulgi E 102 に分かち書きがみられる。ninda igi *du₂-ru-na-bi šu bi₂-[ri-ri]*

15) 後期の {*durun*} の適切な翻字については今後の課題とする。

16) 例は確認できていないが、筆者は {*durun*} が使役的に用いられるとき、無生物の複数性の場合でも {*durun*} に {*eš*} が後続することはありうると考えている。複数語基と三人称複数接尾辞がそ

数性を示すことはない。

- (20) Sollberger, *Corpus En.* I 2 iii 2-3 (初期王朝期)
 ur-ha-lu-ub₂ i₃-du₈-še₃ mu-na-**durun_x**(**TUŠ.TUŠ**)-na
*haluppu*の木(で作られた)犬を門番として彼のために座らせた。
- (21) *Nik* II 53: 3-4 (アッカド期)
 udu bar-a i₃-**durun_x**(**TUŠ.TUŠ**)-nam
 羊を別に住ませた。
- (22) Gudea Cyl. A viii 8-9 [Edzard, *RIME* 3/1] (Ur III期)
 udu i₃ gukkal maš₂ niga ensi₂-ke₄ ^{M₂AŠ₂GAR₃} giš nu-zu su-ba mi-ni-**durun_x**
 (**TUŠ.TUŠ**)¹⁷⁾
 エンシは複数の家畜を未経産の若い雌ヤギのところに[?]住ませた。
- (23) Gudea Cyl. A xxix 8 [Edzard, *RIME* 3/1] (類例: Cyl. B xvi 9; 18; *NG* 120a: 3) (Ur III期)
 tu^{mušen} **du₂-ru-na-bi**
 鳩がいて、
- (24) *MVN* XVI 711, Vs. 1-2 (類例: *MVN* XVI 715, Vs. 3; Gudea Cyl. A xxvi 27 **du₂-ru-na-am₃**)
 (Ur III期)
 0.1.0.0 še ša₃-gal uz-tur e₂-maš-a **du₂-ru-na**
 EmašにいるUztur鳥への食料60シラ
- (25) Falkenstein, *NG* 138: 8-9 (Ur III期)
 udu ab-ba-ga₂ 180-am₃ u₃ kab-us₂-bi ki-šu₂-la-lum-ma-ka i₃-**du₂-[ru]-un**
 私の父の羊 180 頭とその牧人が[?]*Sulalum* のところにいた。
- (26) Michalowski, Royal Correspondence 21 (Puzur-Šulgi to Ibbi-Sin) l. 13 (前二千年紀)
 nam-ra-ak-ne-ne ak-de₃ uru-uru-bi **TUŠ-TUŠ**-u₃-de₃
 Michalowski: I shall despoil (these places) and (re)settle them.
- (27) Inanna and Bilulu 51 [Jacobsen and Kramer, *JNES* 12 (1953)] (前二千年紀)
 kaš ud-re ud-su₃-ra₂ **TUŠ**¹⁸⁾-**ru-na-bi-a**
 ビールが遠い日、遠い日からおいてあり、

↙ それぞれ別の事物の複数性を表示する場合については、{sug}と{lah}の例がある。前者については(51)(52)を、後者については(106)、(105)で例をみる。

17) 末尾にnがないため、{durun}であるとは確定できないが、{durun}であるとする、初期王朝期の書記法に従ってdurun_xと書いている可能性と、{durun}の重複の可能性がある。

18) Jacobsen and Kramer, *JNES* 12 (1953)のtransliterationではdur₃とあるが、粘土板のコピーはdur₂(TUŠ)である。

- (28) *Enmerkar and Ensuhkešdanna* 172 [ETCSL¹⁹ 1. 8. 2. 4, 172; Berlin, 同172] (前二千年紀)

e_2 -[tur₃]-ra (Berlin: e_2 -t[ur₃]-[mah?]) e_2 ab₂ **TUŠ-ru-na-aš** ba-te
彼は雌牛がいる牛小屋に近づいた。

- (29) Ur-Nammu A 70 [Flückiger-Hawker, *OBO* 166] (前二千年紀)

lugal x [anše]-ni ba-da-**TUŠ-ru** a-ne ki mu-un-di-ni-ib-tum₂
王とともに[?]彼のロバがいた。ロバは彼とともに埋葬された。

- (30) LUr 362 [Kramer, *AS* 12] (前二千年紀)

e-ze₂-zu amaš(!)-bi-a ba-ra-mu-un-**TUŠ-ru(-un(!))**
あなたの羊はその羊の柵にいてはならない。

無生物の複数性を表示する場合の {durun} は「(複数の動物が) いる」もしくは「(複数のものを) おく」を意味する。有生物、無生物の場合ともに「座すもの」の複数性を表示するといえる。ただし (26) と (29) は末尾に n があらわれないため、{durun} であるとは確定できない。

{durun} (dur₂-ru-un) は *NBGT* の記述によると、*hamṣu* と *marû* である。{durun} の語基自体が *marû* 形式であるかどうかは別にしても、後期の例 (13) (14) において {durun} に *marû* を示す {e} が後続する例がみられ、{durun} が *marû* アスペクトで用いられたことは確認される。{durun} には三人称複数接尾辞の {eš} は後続するが、三人称複数接尾辞の {ne} は後続しない。これは以下でみる複数語基全てに共通する特徴である。アスペクトによって分布の異なる三人称複数接尾辞 {eš}, {ne} との関係は重要な問題である。

{durun} の複数性はその文が他動詞であるか自動詞的であるかに関わらず、「座すもの」の複数性を表示する²⁰⁾。複数性の関与について有生性による区別はない。他の複数語基においてもその複数性が関与する項は複数語基ごとに意味的に規定されていることを確認する。

II {sug} 「立つ」

gub 「立つ、従事する (単数)」に対応する複数語基である。gub が DU と書かれるのに

19) ETCSL ウェブサイトはオクスフォード大学の J. Black 教授が中心となり、シュメール語の文学作品の翻字、翻訳、参考文献を公開しているものである。このプロジェクトはまだ完了していないが、未公開資料も含め、シュメール語の多くの文学作品が利用できる。(http://www-etcs.orient.ox.ac.uk)

20) シュメール語は名詞句は格接辞が落ちることがしばしばあり、さらに名詞句そのものが省略されることも多い。動詞は語根自体に他動詞、自動詞の別はなく、一定の傾向はあるものの文としては自動詞的にも他動詞的にも使役的にもなりうる。そして split ergative の根拠になる動詞語基の前後にあらわれる代名詞要素も必須ではない。シュメール語の統語構造には数多い様々な動詞接辞が関与していると考えられるが、現在のところ明らかでない部分が多い。

対し、基本的に DU を二つ書いて表記する。初期王朝期は $su_x(DU.DU)^{21)}$ で、Ur Ⅲ期の裁判文書 (Di-til-la) とグデア円筒碑文では $šu_4$ で表記される。後期には $su_8(DU:DU)$ で表記され、 su_8 のあとにすぐ g を記す表記 (su_8-ge, su_8-ga) の外に su_8-ug の表記が用いられる。I の {durun} 「座る」の場合と同様に、{sug} もどのような文であるかに関わらず、「立つもの」の複数性を表示することを確認する。NBGT の記述は次の通りである。

(31) NBGT II i 5-6 [MSL IV, p. 148]

$su^{ub}DU$ = $u_2-zu-uz$ DIŠ *ha-am-tu_2* 「立つ 単数 *hamtu*」
 $su^{ug}DU:DU$ = $u_2-zu-uz$ MEŠ *ma-ru-u_2* 「立つ 複数 *marû*」

1 有生物の複数性を表示する {sug}

初期王朝期では $su_x(DU.DU)$ 、グデア円筒碑文と Ur Ⅲ期の裁判文書では $šu_4$ 、Ur Ⅲ期以降の他の文書では $su_8(DU:DU)$ であらわれる。例は非常に多い。

以下の例は複数の人物が動作主で自動詞であるものが多い。他動詞的で被使役者の複数である可能性がある例もみられる²²⁾。

(32) *STH* 1 18: 11. 10 (類例: *STH* 1 24: 4. 16) (初期王朝期)

/ 複数の人物 / $udu-nig_2-ku_2-a$ $ba-su_x-ge-eš_2$

複数の人物が肥育用の羊のところに立った。

(33) *TSA* 13: v 4 (類例: *TSA* 13, V 10) (初期王朝期)

$anše-BIR_3-ra-ke_4$ $ba-su_x-ge-eš_2$

彼らはチームのロバの所に立った。

(34) *TSA* 15: xiv 13 (初期王朝期)

/ 複数の人物 / $ba-su_x-ge$

複数の人物が… に立っていた。

(35) Westenhof, *ECTJ* 5: 10-11 (*TMH* V 5) (初期王朝期末～アッカド期初)

/ 複数の人物 / gan_2-ga $i_3-su_x-ge-[x^?]$

複数の人物が畑に立っ(てい)た。

(36) Gudea Cyl. A xx 23 [Edzard, *RIME* 3/1] (同例: Gudea Cyl. B i 11) (Ur Ⅲ期)

$^4a-nun-na$ $u_3-di-de_3$ $im-ma-šu_4-šu_4-ge-eš_2$

21) $DU:DU$ と区別せず、 su_8 と翻字されることもあるが、本稿では区別できるものについては $DU.DU$ と表記する。コロンの使う $DU:DU$ の表記は DU が縦に並んで一つのサインであることを示す。ピリオドによる $DU.DU$ の表記は DU サインが横に並んでいることをあらわす。

22) ただし単数の動作主をとる自動詞で {sug} があらわれる例外的な用例もある。Šulgi B 123-124 [ETCSL 2.4.2.2]: $šeš$ $gu_5-li-gu_{10}$ $šul$ $^4utu-gin_7$ $za_3-še_3$ $pirig-gin_7$ $su_8-su_8-ge-ga_2$ 「私の兄弟で友人たる、若きウツ神のように、私はライオンのように速く走り、」

Anunnaの神々が感嘆して立っていた。

- (37) Gudea Cyl. B xi 13-14 [Edzard, *RIME* 3/1] (類例: Cyl. A xiv 3-4: 「mu-da-an¹-š_u₄-ge-eš₂) (Ur III期)

nam-šita_x(*REC* 316)-sa₆-ga gu₂-de₃-a-da en ^dnin-gir₂-su-ra mu-na-da-š_u₄-ge-eš₂

彼らはよき祈りにおいて、Gudeaとともに君主たる Ningirsu 神のために立った。

- (38) *NG* 126: 16-17 (*RTC* 295) (類例: *NG* 209: 72 (*TMHC NF* I-II 271), nu-ub-š_u₄-ge-ša-am₃) (Ur III期)

/複数の人物/ ki-di-dib₂-ba u₃ nam-erim₂-TAR-a-ba i₃-ib₂-š_u₄-ge-eš-am₃

複数の人物が判決と宣誓の場所にいた。

- (39) Cohen, *ELA* 353-354 (類例: Hoe and Plough 31 [ETCSL 5.3.1]) (前二千年紀)

nam-lu₂-ulu₃-aratta^{[k]i}-ke₄ anše-bara₂-la₂-e u₆-di-de₃ im-ma-su₈-su₈-ge-eš

Arattaの人々は荷運びロバの前に感嘆して立っていた。

- (40) Winter and Summer 107 [van Dijk, *La Sagesse suméro-accadienne*; ETCSL 5.3.3] (前二千年紀)

2-na-ne-ne am-gal-du₇-du₇-gin₇ u₃-na ba-an-su₈-ge-eš

彼ら二人はうなり声をあげる野生の雄牛のように猛り立った。

- (41) Michalowski, *LSUr* 446, 448 (前二千年紀)

gu₂ ki-še₃ gal₂-la-bi ba-e-su₈-su₈-ge-eš kur₂-re ba-ab-lah₅-e-eš uru-kur₂-še₃ ba-e-re₇(DU:DU)-eš

彼らは降伏して、立っていた。彼らは異国の人[?]に連れ去られた。……彼らは異国の町に行った。

(su₈(DU:DU), lah₅(DU:DU), re₇(DU:DU)が並ぶ。ただし re₇の読みは確定しない。)

- (42) Inanna and Bilulu 41 [Jacobsen and Kramer, *JNES* 12 (1953)] (前二千年紀)

e(?) 「a¹-ra-zu sun₅-sun₅ mu-un-na-su₈-ug

彼らは祈りに畏まって従事した[?]。

- (43) Išme-Dagan H, 4 [ETCSL 2.5.4.8] (前二千年紀)

dingir an-na an-na bi₂-su₈-ug mu-dug₃ im-mi-in-sa₄

(Enlil 神は) 天の神々を天に立たせた。彼らによい名をつけた。

{eš}が後続するときはほぼ規則的に -ge- が挿入される。-ge- で終わる (34) のような例は珍しい。この後続要素を伴う場合の -ge- が、単に同じサインを用いる複数語基 {sub} 「行く(複数)」との区別のためだけの表記であるかどうかは議論の余地があり、-ge- の部分に *marû* アスペクトの {e} が含まれる可能性も考えられる。(42) や (43) など後期にみられる su₈-ug の表記は後続要素がない場合にみられる。

(43) は明示的ではないが単数の使役者 (=Enlil 神) があり、被使役者である天の神々の複数性が複数語基によって表されている。

2 無生物の複数性を表示する {sug}

無生物の複数性を表示する {sug} の例である。{durun} の場合と異なり、基本的に動物には使われない。無生クラスの動物の場合に {sug} の代わりに gin.gin があらわれることを吉川 [1979: 681-83] が指摘している²³⁾。このことから吉川は Agent-governed の {sug} は有生クラスの複数を表示すると解釈し、有生物と無生物両方の複数性を表示しうる Object-governed の {sug} と区別している²⁴⁾。

しかしながら、本稿では複数語基 {sug} が動物に使われないのは {sug} の複数語基としての特徴ではなく、対応する単数の gub に由来する動詞の意味的特徴であると解釈する。これについては 2. 2 で後述する。動物以外の無生物は一般的に動作主にはならないが、自動詞文の主語にはなりうる。よって {sug} についてだけ、有生性に関する区別があるとする記述は必要なく、複数語基の複数性はすべて有生性には無関係であるとまとめられる。

無生物の場合について以上のことを動物以外の無生物 (2. 1) と動物 (2. 2) の場合に分けて考察する。

2. 1 動物以外の無生物の複数性を表示する {sug}

つねに「立つもの」の複数性をあらわす。

(44) Gudea Cyl. A xxiv 18, 18, 26-27 [Edzard, *RIME* 3/1] (26-27の類例: Cyl. A xxvi 20; xxix 5)

(Ur III期)

18) dub-la₂-bi am-gin₇ mu-š_u₄-š_u₄

その門を野牛のように立てた。

26-27) e₂-a dub-la₂-bi š_u₄-š_u₄-ga-bi la-ha-ma abzu-da š_u₄-ga-am₃

家にはその門を立て、Lahama 像を Abzu の側に立てた。

(45) Gudea Cyl. B xvii 7 [Edzard, *RIME* 3/1] (類例: Cyl. B xvi, š_u₄-ga-bi; gub-ba-bi(単数形))

(Ur III期)

bur-ku₃ unu₆-gal-la š_u₄-ga-bi

食堂に立つ聖なるボールは、

(46) Šulgi V 25 [Frayne, *RIME* 3/2, Šulgi 1. 2. 54, 25] (Chiera, *SRT* 13) (前二千年紀)

^dnanna unu₂ (text: GUR₈.UNUG) kin-nim bur-nun su₈-ga-ni

23) 吉川 1979: 682 を参照。DP 212, II 4: /複数の動物/ mu-gin-gin-na-am₆; *Nik* I 157, vi 5-v 6: /複数の動物/ e₂-gal-la mu-na-gin-gin-na-am₆ [Selz, *FAOS* 15/1: e₂-gal-še₃ mu-na-gin-gin-na-kam], 二例とも吉川は「行った」と訳出している。{sug} が {sub} 「行く (複数)」の意味で使われることが Krecher 1967: 8-11 によって指摘されている。gub 「立つ (単数)」ではなく、代わりに gin 「行く (単数)」が重複してあらわれるのは動物に gub が使えないためであろう。

24) 吉川 1979 は Agent を動作主ないし主語として、Object を目的語として使用している。

彼は Nanna 神のために朝食の食堂によいボールをおき、

- (47) Cohen, *ELA* 312, 314 (前二千年紀)

bur-gal-gal an-ne₂ ba-su₈-su₈-ug ... bur-i-gi₈-an-na da-bi-a ba-su₈-ug

大きなボールが天に向かっておかれた。... igianna ボールがその側におかれた。

- (48) Iddin-Dagan A 197 [ETCSL 2. 5. 3. 1] (前二千年紀)

nidba su₈-ga-še₃ bur su₈-su₈-ga-še₃

おかれた捧げものに、おかれたボールに、

- (49) Cooper, *Curse of Agade* 131 (類例: 同229:su₈-su₈-ga-bi) (前二千年紀)

la-ha-ma dub-la₂-gal e₂-e su₈-ga-bi

家の大きな門におかれた Lahama 像

- (50) Warad-Sin 8, 18-20 [= Thomsen 1984: 131] (前二千年紀)

IR₃-dEN. ZU (...) ur^{du}alan gal-gal(-la) (...) bi₂-in-su₈-ga

大きな銅像を立てた Warad-Sin,

(44)~(46)にみられる分詞形は動詞語基の前に接辞もなく、{sug}が他動詞的であるか、自動詞的であるかを明示しない。また(47)は後期の例であるが、動詞語基の前の接辞がba-だけであり、文脈上も明らかな動作主がなく、自動詞的である可能性が高い。統語関係は不明確であるが、{sug}の複数性は全て「立つもの」に関与する。

吉川 1979 では他動詞としての{sug}や{durun}は無生クラスの事物を目的語とし、普通三人称複数有生接辞{eš}はみられないとしているが、後期の文学テキストでは、(51) (52)のような例がみられる。従来、(51)は{eš}を解釈しないまま、自動詞として訳され、(52)は複数語基と{eš}がともに使役者として解釈されてきた²⁵⁾。しかしながら、{eš}が無生物に対応することはなく、本稿で示すように、複数語基が使役者({sug}の場合「立たせるもの」)の複数性を表示することはない。(51)や(52)では{eš}が使役者である有生物の複数性を、複数語基{sug}は「立つもの」である無生物の複数性を示すと解釈するのが妥当である。複数語基と{eš}がそれぞれ別の事物の複数性を表すものとして、ほかに{lah}に例がみられる。{lah}については(104)、(105)で例をみる。

- (51) Civil, *Sumerian Flood Story* 201 (前二千年紀)

im-hul-im-hul im-si-si-ig du₃-bi teš₂-bi i₃-su₈-ge-eš

(神々は)imhul嵐とimsig嵐を全て一緒におこした。

- (52) Lahar and Ashnan 76 [Alster and Vanstiphout, *ASJ* 7(1987)] (前二千年紀)

kalam-ma mu zag-še mu-da-su₈-su₈-ge-eš

25) Civil の訳は嵐が存在したという自動詞的なもので、{eš}の解釈が不明である。この行は5コラムの冒頭で4コラムの下部は欠損している。

(人々は)国土において名²⁶⁾を端まで行き渡らせていた。

上の二例において {sug} は「立つもの」の複数であるから、それぞれ無生物の嵐と名の複数性に関与し、{eš} はその動作をおこす使役者の有生物（人もしくは神）が複数であると解釈できる。複数語基と三人称複数接尾辞は別の事物の複数性をそれぞれ表示している。どの複数語基においても複数性が使役者に関与することはないため、(51)が「嵐が神々を立たせた」になることはない。「立つもの」が単数であれば、使役者が複数であっても複数語基が用いられることはなく単数の gub が使われる。

(53) Dumuzid and Geštinanna 18 [ETCSL 1. 4. 1. 1] (前二千年紀)

guruš-e mu-ni-in-gub-bu-de₃-eš mu-ni-in-TUŠ-de₃-eš

彼らは若者を立たせる。彼らは座らせる。

2. 2 動物（無生物）の複数性を表示する {sug}

{sug} が動物の複数性を表示する珍しい例として(54)がある。{sug} は他の複数語基と同様、無生物の複数性を表示できるが、先に述べたように動詞の意味における制限があるため、数が少ないと仮定する。

(54) Sumerian Temple Hymn, 485 (TCS III)

^dutu-ur₂ maš₂-anše u₂-a x mu-ni-in-su₈-ug (var. sug₂)

Utu 神のために野生動物が草の上にいる。

対応する単数形 gub においても実際に動物が「立つ」例は次のようである。数が多い gub の全体数に比し、数が非常に限られる²⁷⁾。(55)は(54)に対応する単数の例である。両者ともに野生動物が自然の状況で存在する様子をあらわす。また(56)は否定文であり、哀歌で家畜が増えない様子を記述する単数の例である。

(55) Inana et Ebih 124-126 [Attinger, ZA 88; Limet, Or 40]

šeg₉ lu-lim-bi ni₂-ba mu-un-lu²⁸⁾ am-bi u₂ lu-a mu-un-gub darah-bi ha-aš-ur₂-

26) 文脈上からは mu 「名」は単数か複数かはっきりしない。しかしながら他の複数語基の例からみても {sug} が使役者（人々）の複数性を表示するとは考えられない。

27) これらの gub 以外に Ur III 期の行政経済文書では、gud-apin-gub-ba テキスト等に牛やロバなどの農耕用家畜について、gub-ba という記述がみられる。この表現は la₂-ni, zi-ga, ri-ri-ga などの用語と対立して使われ、主動詞としてはあらわれないことから、行政経済文書の術語である可能性が高い。「従事中である」もしくは「配置された」等の意味が考えられるが、意味は確定していない。この gub についての扱いは今後の検討課題にしたい。

牛などにたとえられる神や町が「立つ」という表現は(40)のほか文学作品に多くみられる。(Enki 神は) gud du₇-du₇-gin₇ u₃-na mu-un-na-gub (EWO 252); šul ^dutu gud silim-ma gub-ba u₃-na silig gar-ra (EWO 375); urim^{ki} am gal u₃-na-gub-ba ni₂-bi-ta nir-gal₂ (LSUr 52); sun₂ tur nam-šul-ba gub-ba [= Šulgi] (Šulgi X 84); pirig gur₅-uš bur₂ me₃-še₃ u₃-na gub-bu [= Numušda] (Sin-iqišam A 13) 他多数。

28) Attinger は読みを durun[?] とする。

hur-sag-ga₂-ka e-ne-su₃-ud-bi im-me

šeg₉ や lulim が自ら増える。野生の雄牛は青々と茂った草の上に立つ。darah 鹿は山の hašūr の木のところで交尾をしている。

(56) Michalowski, *LSUr* 6-8

tur₃ gul-gul-lu-de₃ amaš tab-tab-be₂-de₃ gud-bi tur₃-bi-a nu-gub-bu-de₃ udu-bi
amaš-bi-a nu-dajal-e-de₃

牛小屋が破壊されるべく、羊の柵は壊されるべく、その牛はその牛小屋で立たぬよう、その羊がその羊の柵で増えぬよう、

これらの文学作品の例から {gub} や {sug} が動物について使われるのは、特定の文脈であることが推測される²⁹⁾。よって {sug} も {durun} と同様に、自動詞文であるか他動詞文であるか、また有生性に関わらず、「立つもの」の複数性を表示すると考えられる。

複数語基 {sug} の表記は基本的に初期王朝期が su_x(DU.DU).g, Ur III 期 (グデア碑文と裁判文書) が šu₄.g, 前二千年紀には su₈(DU.DU).g³⁰⁾ である。後期の su₈-ug の表記は (42), (43), (47) にみられるように後続する要素がない場合に用いられる。{sug} (su₈-ug) は NBGT の記述によると, *marû* である。語基自体が *marû* であるかどうかの判断は難しい。テキストにおいて *marû* の接辞 {e} が後続すると断定できる例はほとんどなく、次に扱う {sub} 「行く」の場合とあわせて、{sug} について後続要素がある場合にみられる -ge- に *marû* の接辞が含まれていないかどうか今後検討する必要がある。三人称複数有生接辞に關しては {durun} と同様に {es} が後続するが、{ne} の後続例は全くみられない。

III {sub} 「行く」

IV で扱う {ere} 「行く」とともに gin(DU) 「行く (*hamtu*)」/du(DU) 「行く (*marû*)」に対応する複数語基である³¹⁾。{sug} の場合と同様に、対応する単数形が DU と書かれるのに

29) 動物が「立つ」という表現について gub が用いられないが、それに代わる表現は分らない。「(複数の動物が) いる」という意味では {durun} や後述の {se} が使われる。{se} の用例は Ur III 期から減少する。Steinkeller, *SEL* 1 (1984) が三千年紀においては lug_x (LUL) (動物単数), ti (人間単数), se₁₂ (人間複数・動物複数) と相補分布的にあらわれることを指摘する。

30) 前一千年紀に su₈.g に対応して šu₂.g の例が見られる。Cohen, *Canonical Lamentations*, UŠUMGIN NI SIA 41: dim₃-me-er-an-na mu-un-su₈-su₈-ge-eš: me₃-su₈-su₈-ge-eš mu-e-ši-šu₂-šu₂-ge-eš 「天の神々が立っている。彼らはあなたに対して立っている。」 su₈.g と並べて šu₂.g と記されるが、前一千年紀の新しい variant であると考えられる。

31) 後続する子音がなく、分かち書きもされない場合、読みが不確定である例として以下のようなものがある。アッカド期までの DU.DU においては su_x もしくは er_x (さらに複数の有生物の他に動作主が想定される場合は lah₅) の可能性がある。後期の DU:DU は, su₈ もしくは re₇ (もしくは lah₄) の可能性がある。多くの例がみられるが、その一部をあげる。 ↗

対し, {sub} は su_8 (DU:DU).b と書かれる。

MSL II p. 144, 7-9 などから DU:DU が su と re の音価を持つことは確実である。そして su_8 と re_7 の意味が重なることから, Steinkeller 1979, Thomsen 1984 など多くの研究者がアスペクトによる形式の違い (re_7 (*hamtu*) 対 su_8 .b(*marû*)) と解釈している。この見方は (57) の NBGT の記述に基づく。しかしながら {sub} と {ere} がアスペクト対立による形式であるかどうかは疑問の余地がある。

(57) NBGT II 3-4 [MSL IV, p. 148]

DU:DU = *a-lak* MEŠ *hamtu* (UL₄) 「行く 複数 *hamtu*」
 [DU:DU]-be₂ = *a-lak ma-ru-u₂* 「行く (複数) *marû*」

まず, この (57) の NBGT の解釈は, Black 1991 をはじめ, (57) の 1 行目の DU:DU を re_7 と読むのが一般的である。しかしながら, re_7 と su_8 は同じサイン(DU:DU)で区別できない。(57) の 1, 2 行目は re_7 と su_8 -be の対立ではなく, su_8 と su_8 -be の対立とも解釈できる。 su_8 -be₂ という形式は実際のテキストでは後接要素なしではほとんどあらわれない形

-
- ◇Nik I 14: 1. 7; 3. 8; 5. 1 [FAOS 15/2/1, Nik 14: 1. 7; 3. 8; 5. 1] (初期王朝期)
 / 複数の人物 / nig_2 -šu-še₃ ba-DU.DU-eš₂
 1 PN nig_2 -šu-še₃ ba-DU (Nik I 14: 5. 4) に対応する単数の例がある。DU.DU を Selz は “stehen” と解釈する。同テキストに同じく 1 人の場合に {eš} があらわれる例がある。1 PN nig_2 -šu-še₃ ba-DU-«eš₂» (Nik I 14 5. 12)
- ◇Gudea Cyl. B i 10 [Edzard, RIME 3/1] (Ur III 期)
 un ba-gar-gar UN ba-DU.DU
 人々は定住し, 人々はやってきた。(Edzard: the Land has gone home.)
- ◇Edzard, SRU 99 II 9-10 (同テキストに同例が他に3箇所ある。)(アッカド期)
⁴i₇-še₃ al-DU.DU
 複数の人物が河の神 (のところ) に行った。
- ◇Gilgameš and Agga 1-2 [Römer, AOAT 209/1] (前二千年紀)
 lu_2 -kin-gi₄-a ag-ga dumu-en-me-ba₂-ge₄-si-ke₄ kiš^{ki}-ta ^dgilgameš-ra unu^{ki}-še₃
 mu-un-ši-DU:DU-eš
 Enmebaragesi の息子, Agga の使者達が Kiš から Gilgameš の所にウルクへ行った。
- ◇Dumuzi and Geštinanna 2 [ETCSL 1. 4. 1. 1] (類例: 同66) (前二千年紀)
 ga_2 -nam-ma-an-ze₂-en ur₂ kug ^dinana-ka-še₃ ga-da-DU:DU-en-de₃-en
 「さあ, 聖なる Inanna 神のもと[?]に私たちは行きましょう。」
- ◇Ur-Namma A 64 [Flückiger-Hawker, OBO 166] (前二千年紀)
 erin₂ lugal-da [i₃]-DU:DU-eš-a er₂ mu-da-ab-us₂-e
 王とともに来た軍隊は (王の死に) 涙を流している。Flückiger-Hawker は re_7 (DU:DU) と読む。
- ◇Volk, Die Balag-Komposition Uru₂ Am₃-ma-ir-ra-bi Tafel 20, 31 [FAOS 18(1989)] (前二千年紀)
 ba₂-ba[ra₂ k]i-us₂-dili-am₃ mu-un-da-DU:DU-DU:DU-e-eš a-「šib⁷ pa-rak-ki kib-sa
 iš-ten i-re-ed-du-ni: šu-hu-「zu⁷-ni
 玉座に座るもの達は一つの足跡をたどる。

であるが、*marû* の要素 {e} の後続を示すとも解釈できる。単に b で終わることを示すためには、(31)で {sug} が su_8-ug と書かれるように su_8-ub との表記も可能である。「行く」の複数語基 DU:DU の読みに関しては 3 節でも述べる。

{sub} については、3 節で扱う語彙テキストである *OBGT* III-VII に多数の例があるが、それ以外のテキストで {sub} であることが確認できる例はあまり多くない。特に Ur III 期までの例が極めて少ない。{sug} について $\mathring{su}_4.g$ がみられるが、{sub} について $\mathring{su}_4.b$ はみられない。{sug} の場合と同じく、後期テキストでは後続要素がない場合に su_8-ub の表記がみられる。

1 有生物の複数性を表示する {sub}

自動詞文の動作者もしくは使役的な他動詞文の被使役者で、どちらの場合も「行く人」の複数性を表示する。

- (58) *TCS* I 173: 9 [BM 29893] (Ur III 期)

kaskal-še₃ i₃-su-be₂-eš³²⁾

彼らは遠征に行く。

- (59) *TCS* I 5: 23 [BM 134635] (Ur III 期)

gu₂-še₃ a₂ he₂-ga₂-ga₂-e gu₂-e ma-an-su₈-be₂³³⁾

……彼らはこちらに[?]私のところに来る。

- (60) Falkenstein, *ZA* 55 (1962: 52, n. 154) (*AnOr* XXVIII 123, *TCL* XV 18 I 2) (前二千年紀)

hul₂-la zalag-ga-a mu-su₈-be₂-eš

喜んで、明るく、彼らは行った。

- (61) *TMH NF* 3 5: 24 [= Krecher 1967: 3] (前二千年紀)

a-na-gin₇-nam kur-še₃ i₃-su₈-be₂-en-d[e₃-en]

我々はどのように山へ行くのか?

- (62) *UET* VI/1 103: 42-43 [= Thomsen 1984: 135] (前二千年紀)

zid-da gub₃-bu-zu nam nam-ti-la-še₃ ud su₃-ra₂-še₃ he₂-em-da-su₈-su₈^{su-su}-be₂-eš

あなたの左右に命の運命[?]のために永き日のために彼らを行かせるように。

- (63) Cohen, *ELA* 335-336 (前二千年紀)

nam-lu₂-ulu₃ kiši₆ ki-in-dar-ra-gin₇ aratta^{ki}-aš ni₂-ba mu-un-su₈-be₂-eš

彼らは人々を割れ目の蟻のように彼ら自ら Aratta に行かせた。

- (64) Cohen, *ELA* 479 (前二千年紀)

32) su で表記される珍しい例である。コピーがなくサインは確認できない。

33) *TCS* I の翻字に従う。コピーがなく、DU:DU と DU:DU のどちらのサインであるか確認できない。

uru-na udu-gin₇ igi-ni hu-mu-un-su₈-ub

彼の町では彼らは羊のように彼の前を行った。

- (65) Išme-Dagan X, 2 [Sjöberg, ZA 63(1974: 40)](前二千年紀)

ešgiriš-šu-du₈ nam-bi tar-tar ^da-nun-na su₈-su₈-ub [(x)]

杖を手に持つもの、運命を定めるもの、Anunnaの神々を行かせるもの、(= Enki 神)

- (66) Išme-Dagan W, B6-7 [Marie-Christine, SANTAG 2](前二千年紀)

^da-nun-na ub-šu-un-kin-na [...] ^den-lil₂ ^dnin-lil₂-ra su₈-su₈-[^ub] [...]

Anunnaの神々は-Ubšu-un-kinでEnlil神とNinlil神のところに行き、

2 無生物の複数性を表示する {sub}

無生物の複数性を表示する例は数が少ない。

- (67) TSA 1, xii 4-5 [= Steinkeller 1979: 61](初期王朝期)

/ 複数のもの / ^{sis}gigir uru gir₂-su^{ki}-ta DU.DU-ba-bi ba-tum₂

複数のものがそのGirsuから来た車で運ばれた。(車の複数性を表示)

- (68) Michalowski, LSUr 43 (前二千年紀)

e-el-lu šir₃ gud su₈-su₈-ba eden-na nu-di-de₃

牛(の群)を追う歌が平原で歌われぬべく、

(他の文学作品においても、類似の文脈で同様の例がみられる。)

Ur III期以前の、su_x(DU.DU).bの表記の例は限られる。現在筆者が確認できる例は(67)である。今後他に例がどの程度みられるか確認する必要がある。「行く」を意味する複数語基の表記と{eš}のアスペクトについて次節でOBGTの記述を検討する。

3 OBGTにおける複数語基「行く」に関する記述

OBGT (Old Babylonian Grammatical Text)は、古バビロニア期(前二千年紀前半)にバビロニア人がシュメール語の文法を記述するために作成したテキストである。この中に「行く」を意味する動詞に様々な動詞接辞が付された形式を扱った箇所がある。このOBGTの記述から、バビロニア人による複数語基「行く」と三人称複数有生接尾辞{eš}のアスペクトの理解を確認する。シュメール語の平叙文のhamtu形式は、アッカド語動詞の時制・アスペクト形式のpreteriteもしくはperfectで、またシュメール語のmaru形式はアッカド語のdurativeで訳出される。

DU:DU「行く」に関して後続要素がある箇所では、-be₂-の有無によってアッカド語の動詞形式が異なる。(69)のように-be₂-がある場合はアッカド語でdurativeで訳されるのに対し、-be₂-のない(70)はpreteriteで訳出され、-be₂-の有無でアスペクトの区別があることを記述している。

(69) *MSL* IV, *OBT* VII 295 – 297 (類例: VII 295 – 297, 298 – 300, 301 – 303, 304 – 306)

[in-ne-s] _{u₈} (DU:DU)-be ₂ -eš	i- ^ʔ la-ku ^ʔ šu-nu-ši	彼らが彼らのところに行く。
in- ^ʔ ne ^ʔ -su ₈ (DU:DU)-be ₂ -en-de ₃ -en	ni- ^ʔ lak šu-nu-ši ^ʔ	私たちが彼らのところに行く。
in- ^ʔ ne ^ʔ -su ₈ (DU:DU)-be ₂ -en-ze ₂ -en	ta-la-ka [š _{u-n}]u-ši	あなたたちが彼らのところに行く。

(70) *MSL* IV, *OBT* VII 310 – 312 (類例: VII 307 – 309)

ʔ ^ʔ -im-ne-DU:DU(!)-eš	il-li-ku-nim šu-nu-ši	彼らが彼らのところに来た。
[i-i]m-ne-DU:DU-en-de ₃ -en	ni-il-li-ka-m šu-nu-ši	私たちが彼らのところに来た。
[i-im-n]e-DU:DU-en-ze ₂ -en	tal ₂ -li-ka-nim šu-nu-ši	あなたたちが彼らのところに来た。

また一人称の希求である ga- に DU:DU が後続する場合、-be₂- のない形があらわれ、二人称・三人称の希求である he₂- のあとは -be₂- が後続してあらわれる。ga- は基本的に *hamtu* 形式をとり³⁴⁾、希求の場合の he₂- は *marû* 形式をとる。これら希求の形式はアッカド語において、precativ で訳出される。

これらのことから、従来 -be₂- がある場合を su₈ と読み、ない場合を re₇ と解釈しているが、この読みを積極的に支持する根拠はなく、どちらの場合も su₈ と読む可能性もありうる。

(71) *MSL* IV, *OBT* VII 102 – 104 (類例: VII 283 – 285 など)

ga ₂ -a-mu-e-en-ze ₂ -en	al-ka-a-nim a-na ši-ri-ya	私のところ来い。(二人称複数命令)
ga-mu-e-ši-DU:DU-en-ze ₂ -en	i ni-il-li-ka-ak-kum	私たちはあなたのところに行きたい。
he ₂ -mu-e-ši-DU:DU-be ₂ -eš	li-il-li-ku-ni-ik-kum	彼らがあなたのところに行くように。

(72) *MSL* IV, *OBT* VII 114 – 116

gin-na-an-ze ₂ -en	al- ^ʔ ka ^ʔ	行け。(二人称複数命令)
ga-gin-en-de ₃ -en	i ^ʔ ni-il- ^ʔ lik	私たちは行きたい。
he ₂ -en-su ₈ (DU:DU)-be ₂ -eš	li- ^ʔ il-li-ku ^ʔ	彼らが行くように。

この複数語基のアスペクトに関して、(71)と(72)の3行目では、二人称・三人称希求の he₂- に後続して動詞があらわれ、アッカド語訳も precativ であることから、動詞は *marû* 形式が期待されるころには、-be₂- が挿入される形式 [su₈(DU:DU)-be₂-eš] があらわれる。これに対し、(71)と(72)の2行目の ga- のあとは一貫して -be₂- のない形式 [DU:DU-en-ze₂-en] であり (*OBT* VII 100, 103, 106, 109, 112, 118, 121, 124), -be₂- を伴う形式 [su₈(DU:DU)-be₂-en-ze₂-en] の形はみられない。この差異が後続する要素によるものではないことは、次の例から示される。状態を表す動詞接辞 al- などに後続する例である。-be₂- のないものではなく、-be₂- を伴う形式があらわれる。

34) ga- は単数の場合、常に *hamtu* 形式をとる。一方、複数の場合、常に一人称複数接尾辞 {enden} を伴い、複数語基か動詞の重複形をとる。*marû* 形式の場合もみられる [Thomsen 1984: 200 – 201]。

(73) *MSL* IV, *OBGT* VII 126–128 (類例: 129–131 他)

al- ¹ su ₈ (DU:DU) ¹ -be ₂ -eš	<i>i-il-la-ku</i>	彼らが行く。
al-su ₈ (DU:DU)-be ₂ -en-de ₃ -en	<i>ni-il-la-ku</i>	私たちが行く。
al-su ₈ (DU:DU)-be ₂ -en-ze ₂ -en	<i>ta-al-la-ka</i>	あなたたちが行く。

三人称複数有生接尾辞のアスペクトに関しては、{ne}が他のテキスト中と同じく、一貫して *marû* 形式に後続する (*OBGT* III 97–98; 155–156 他) のに対し、{eš}はアッカド語で preterite で訳される(70)のような場合だけでなく、durative で訳出される(69)のような場合にもあらわれている。また -be₂-がないものが *hamṭu* 形式で、-be₂-があるものが *marû* 形式であると認識されていることから、{eš}は *hamṭu* と *marû* の両アスペクト形式に用いられるといえる。このことから本稿では一般的な見解とは異なるが、{eš}を両方のアスペクトに用いられると考える³⁵⁾。

OBGT においては、*marû* 形式が期待される場所に DU:DU-ešではなく、su₈(DU:DU)-be₂-ešがあらわれ、*hamṭu* 形式の DU:DU-ešと区別されている。

また先行研究において、cohortative の ga-のあとの複数語基のアスペクトについてはあまり論じられていないが、この記述から *OBGT* においては ga-のあとの DU:DU は読みはともあれ *hamṭu* ととらえられていたことが推測される。

この *OBGT* の記述から -be₂-がないものが *hamṭu* 形式で、-be₂-があるものが *marû* 形式であると当時のバビロニア人によって認識されていたことは確実に証明できる。しかしながらこのアスペクトの対立が {ere} 対 {sub} であるのか、{sub} に後続する *marû* 標識 {e} の有無によってアスペクトを示したものであるかは判断ができないことが分かる。従来の一般的見解は {sub} と {ere} の対立とするものであるが、本稿では sub と sub-e の対立との解釈も可能であることを指摘する。

IV {ere} 「行く」

{sub}と同じく、gin(DU)「行く (*hamṭu*)」/ du (DU)「行く (*marû*)」に対応する複数語基である。初期王朝期は er_x(DU:DU)で記され、Ur III期は e.r もしくは er で表記される。(e-)re₇(DU:DU)の表記は後期にあらわれる。Ur III期の分かち書きが e.r であり、i.r がみられないことから、Ur III期の表記を ir ではなく er とし、初期王朝期の形式を ir_x ではなく er_x を仮定する³⁶⁾。また複数語基の形式を {ere} と仮定する。Ur III期まで用例が少ない

35) 三人称複数有生接尾辞 {eš} は通常 *hamṭu* で用いられると解釈されるが、先行研究においては Attinger 1993: 152; 216–227 が {eš} を *hamṭu* 形式、非命令形、non-cohortative(=O と S) と *marû*(S) の三人称複数有生とする。

36) Ur III期の分かち書きに用いられる IR サインの音価には ir と er の両方がある。研究者によって翻字が異なる。また ir には後期に多用される「運び去る」という動詞もあり、注意が必要である。↗

複数語基 {sub} 「行く」と異なり、Ur III期以前の行政経済文書にも多くみられる。後期テキストでは方向格の動詞接辞 -ši- との共起が顕著である³⁷⁾。{ere}の後期の用例は Krecher 1967: 3-7 に詳しい。

1 有生物の複数性を表示する {ere}

{sub}と同様に「行く人」の複数性を表示するが、初期王朝期から例が確認される。{ere}は{sub}と同様に人称複数接尾辞である{eš}や{enden}を後続させる。他の複数語基と同様にどちらの複数語基も{ne}とは共起しない。

(74) *Nik* I 133: 3. 4-6 (初期王朝期)

[...] 「e₂¹-gal-ta 「er_x¹(「DU¹.DU)-ra-ne i₃-「gu₇¹
王宮から来た…達が食べた。

(75) *MVN* XIII 196 obv. 2-3 (類例: *MVN* XIII 320 rev. 1)(Ur III期)

še-ba geme₂-uš-bar e₂ ^dšara₂-ta e-ra-ne
Šara 神殿から来た羊毛工房女性労働者への穀物支給

(76) *UET* III 1377: 26 [= Steinkeller 1979: 62](類例: *UET* III 1229: 3; 1054: 7)(Ur III期)

/ 複数の人物 / e₂ ^dšara₂^{ki}-ta e-ra-ne
Šara 神殿から来た複数の人物

(77) *Legrain TRU* 334: 5 [= Steinkeller 1979: 62](Ur III期)

/ 複数の人物 / kaskal-ta er-ra-ne
遠征から来た複数の人物

(78) *Sigrist, SAT* II 913 obv. 5 (Ur III期)

mu aga₃-us₂ kaskal-ta er-ra-ne-še₃
遠征から来た近衛たちの代わりに、

(79) *TDr* 85: 4-5 [= *NG* p. 62](類例: *NG* 209: 58: nu-um-e-re-eš; 120b: 10: i₃-im-e-re-eš)(Ur III期)

この動詞は複数語基とはされないが、tum₂(DU)「運ぶ」の emesal との議論もあり、今後検討する必要がある。cf. Tinney, *Nippur Lament* 101: mu-un-ga-bi tum-e ba-ab-ir-ra-am₃; Civil, *JNES* 26 (1976: 207)(*SBH* 57, 35-36)[= Steinkeller 1979: 62, n. 16]: un-zu ma-a-a i₃-DU:DU-eš me la-ba-DU^{ir}-ra la-ba-gub en₃-zu, ni-šu-ka e-ka-a iš-šal-la a-a-iš it-ta-aš-lal-la.

また Ur III期に re と表記される珍しい例がある。Owen, *AOAT* 22, p. 135, 3-5 [= Yoshikawa 1981: 320]: erin₂-ugnim^{ki}-ma-ke₄(!)-ne u₄ kaskal-mar-tu-še₃ i₃-re-ša-a šu ba-ab-ti 「Ugnim の軍が Martu の遠征に行ったときに受け取った。」Owen のコピー、翻字ともに i₃-re-ša-a であるが、他にこの表記がみられないことから er-re-ša-a の可能性も考えられる。

37) 後期の re₇ の前には方向格の -ši- とともに、-e- が頻出する。これが方向格と意味機能が近い位置・終止格であるのか、{ere}の語基の一部であるのかは判断が難しい。

- u₄ ^di₇-lu₂-ru-gu₂-ta i₃-im-**er-re-eš₂**-ša-a
 河の神のところから彼らが来たとき,
- (80) *Fish Catalogue* 254 : 2 (Legrain *TRU* 305, 3 : mu mar-tu maš-maš dilmun **e-ra-ne-še₃**)(Ur III期)
 mu mar-tu maš-maš dilmun-ta **e-ra-ne**
 Dilmun から来た Martu (と), 魔術師のかわりに,
- (81) Sladek, *Inana's Descent to the Netherworld* 348 (前二千年紀)
^{si}hašhur-gu-la-eden-kul-ab₄^{ki}-še₃ gir₃-ni-še₃ ba-e-**re₇^{re}-eš**
 Kulab の平原の大きな hašhur の木のところに, 彼女のあとに彼らは行った。
- (82) Dumuzi and Geštinanna 58 [ETCSL 1. 4. 1. 1](前二千年紀)
 gal₅-la₂ ki ^dgeštin-an-na-še₃ ba-e-ši-**re₇^{re}-eš**
 galla 達が Geštinanna 神のところに行った。
- (83) Inanna G, 19 [Kramer, *PAPS* 107/6 1963 : 503 (*CT* XLII 13, 19)](前二千年紀)
e-re₇^{re}-da-gu₁₀-de₃ **e-re₇-da-gu₁₀-de₃³⁸⁾**
 私が行くとき, 私が行くとき,

2 無生物の複数性を表示する {ere}

後期の {ere} は re₇(DU:DU)が語基末に子音をとらない形式である。基本的に読みが付きされる場合以外は他の複数語基 DU:DU と区別ができないため, re₇ と特定できる例が少ない。後期の無生物の複数性の例は確認できていない。

- (84) *DP* 53 xi 3-4 (初期王朝期)
^{si}gigir GN₁-ta GN₂-še₃ **er_x-ra-a**
 GN₁ から GN₂ に来た車
- (85) *DP* 83 iii 2-3 (初期王朝期)
 gud udu e₂-barag-ga-ta i₃-**er_x-ra-am₆**
 Ebarag からきた牛と羊である。
- (86) *DP* 240 i 2 (初期王朝期)
 anše kaskal-ta **er_x-ra-am₆**
 遠征からきたロバである。
- (87) *Nik* II 440 : 1 (類例 : *Nik* II 440 : 7)(Ur III期)
 5 ur-gi₇ e₂-gal-ta **er-ra**

38) ほぼ同じ例が *TLB* 2, 1 II 25 [= Krecher 1967 : 5] **e-re₇-da-gu₁₀-de₃**, Krecher : “wenn ich gehe” ほかにもみられる。動作主が単数で自動詞的なこれらの {ere} の複数性については問題がある。動作の反復・多回を示す可能性が考えられる。

宮殿から五頭の犬がきて、

- (88) Limet, *Textes sumériens de la III^e dynastie d'Ur* (1976) No. 81 10; Steinkeller, *JCS* 35 (1983: 249)(Ur III期)

gud-udu gir₂-su^{ki}-ta er-ra

Girsu からきた牛と羊

- (89) *Reisner Telloh* 49, 1-4 (Ur III期)

/複数のロバ/ kug-ta sa₁₀-a GN-ta er-ra

銀で買って、GN からきた複数のロバ

- (90) Lafont-Yıldız, *TCTI* 2 L. 3794, 5-8 (類例: Hirose 407: 3)(Ur III期)

0.0.3.0 dabin 0.0.3.0 še ša₃-gal kaskal^{mušen} hu-hu-ri^{ki}-ta er-ra

Huhuri からきた、kaskal 鳥への食料の穀類

- (91) *JCS* 11 (1957: 77), l. 1-3 (Ur III期)

/二頭の雄牛/ kaskal-ta er-ra

遠征からきた二頭の雄牛

初期王朝期においては、{ere} はつねに er_x(DU.DU)で表記されている。後期の re₇ 例については他の複数語基の su₃ や lah₄ と形式上区別がつかないことが多く、判断が難しい。

(67)と(84)は分詞形である。{sub}, {ere}ともに分詞形が多くみられる³⁹⁾。{sub}と{ere}は他の複数語基と同じく、ともに{eš}が後続し、{ne}が後続することはない。アスペクトに関するあらわれ方に目立った特色はなく、他の複数語基との違いは明確でないように思われる。{sub}と{ere}がそれぞれ両方のアスペクトで用いられる可能性があり、ⅢのNBGTの記述も必ずしも根拠とはならないことから、{sub}と{ere}をアスペクト対立による形式と断定するのは問題があると考えられる。ただしその場合、ともに「行く」を意味する{sub}と{ere}の違いについて検討する必要がある。{sub}と{ere}の複数性が、「行くもの」すなわち移動するものに関与することには問題がない。

V {lah} 「連れていく、運ぶ」

tum₂(DU)「連れていく、運ぶ(単数)」に対応する複数語基である。初期王朝期は lah₅ で{sug}や{sub}, {ere}と同じDU.DUで表記される。アッカド期には lah₅(DU.DU)に加えて lah₄(DU:DU)の表記がみられるようになる⁴⁰⁾。Ur III期には分かち書き la.h もみられる。

39) Steinkeller 1979: 61, n. 13 は、Ur III期ではたいてい自動詞の複数の分詞形は単数形から形成されるとする。

40) 前二千年紀以降は lah₄ と lah₅ が *šalālum* 「持ち去る、略奪する」として、用いられることも多い。

後期は {lah} の h が送られることはなく、分かち書きもみられない。そのため形式から lah₅ は区別できるが、lah₄ については re₇ ({ere}) や su₈ と区別できず、注意が必要である。少なくとも後期のテキストについては移動するもの以外に移動させるものが想定される場合は lah₄ と翻字をする傾向にある。

{lah} については Steinkeller 1979: 56 や吉川 1979 が目的語の複数性をあらわす複数語基と述べている。運ばれるものが単数であれば、運び手が複数であっても用いられることはない。{lah} についての用例は Steinkeller 1979 に詳しい。

本稿では、{lah} についても、その複数性は文における絶対格名詞にかかわるといったものではなく、「運ばれるもの (人)」の複数性にかかわると考える。{lah} についての語彙テキストは NBGT II 7-8 ほか、Diri II, An-ta-gal₂ III, VIII などにもみられ⁴¹⁾、Yoshikawa 1979: 299-300 にまとめられている。

今までにみた他の複数語基と異なり、{lah} には marû アスペクト標識 {e} が明らかに後続するのが特徴的である。しかしながらやはり他の複数語基と同様に marû にみられる三人称複数接尾辞 {ne} が後続することはない。

以下で例をみる。後期の lah₄(DU:DU) の例は読みが確定できないものであるが、一応あげておくことにする。

1 有生物の複数性を表示する {lah}

{lah} は連れられる人が複数であることを示す。後続する三人称複数接尾辞の {eš} は {lah} と同じ連れられる人の複数性を示す場合と、運び手の複数性を示す場合があると考えられるが、2 節の無生物の場合と違い、形式上区別がつかない。

(92) *Nik* I 164, ii 2-iv 1 [*FAOS* 15/1 *Nik* 164] (初期王朝期)

PN₁ nu-banda₃ PN₂ unkingal e₂-^dnin-mar^{ki}-x²-še₃ PN₃ aga₃-us₂ PN₄ sipa-bi e-la-lah₅-he⁴²⁾

監督官の PN₁ と軍事司令官の PN₂ が、Ninmar の神殿に近衛の PN₃ と羊飼いの PN₄ を連れて

41) lah₄ や lah₅ に関するテキストは以下のようなものがある。NBGT II 8 は Steinkeller 1979: 59 による lah₆(DU) の仮定の根拠の 1 つとなる。

NBGT II 7-8 [*MSL* IV, p. 148]

de-eDU	=	ba-ba-lum	ha-am-tu ₂	「運ぶ hamtu」
DU	=	ba-ba-lum	MEŠ ma-ru-u ₂	「運ぶ 複数 marû」
An-ta-gal ₂ VIII 145	=	MIN(=ša ₂ -la-lum)	ša ₂	a-la-ki
Diri II 24	=	ia-ahDU:DU	=	ba-ba-lum

42) Selz 1989: 390 は -he を -he-eš₂ の省略と捉えているが、他の例から {lah} は後続要素がなくても marû 標識 {e} を取りうる事が分かる。Yoshikawa 1981: 119 は i₃-la(h_x)-lah_x-eš をあらわしている可能性があるとし、{eš} が個々の動作の個別・独立性を強調し、重複が動作の全体性を表す可能性を示唆する。

いった。

- (93) *ITT* I 1120: 1-3 (アッカド期)
 1 dumu-nita 1 munus SUB(KA×ŠU)-la-ni ba-lah₅-he-eš₂
 SUB(KA×ŠU).Jani によって、一人の少年と一人の女性が連れていかれた。
- (94) *ITT* I 1066 [translit. only] (アッカド期)
 / 11 人の人物 / PN a-ga-de₂^{ki}-še₃ mu-lah_x-he-eš₂⁴³⁾
 11 人の人物を PN が Agade に連れていった。
- (95) Edzard, *SRU* 89, II 7'-III 1, III 9-10 (*BIN* 8 293) (アッカド期)
 ur-si₄-si₄ i₃-gin GIŠ.DU₆.DU₃-^dlugal-ab-zu-a-ta 2 dumu-AN.SUKKAL im-ma-lah₄
 (DU:DU)-eš₂ dumu-AN.SUKKAL 2-bi₃!(BI.ME) ba-lah₅(DU.DU)-eš₂⁴⁴⁾
 Ursisi が来た。GN から AN.SUKKAL の二人の息子を連れてきた。……(AN.SUKKAL が)
 AN.SUKKAL の息子、二人を連れて行った。
- (96) Edzard, *SRU* 46: 14-15 (アッカド期)
 / 複数の人物, PN / [a-g]a-de₂^{ki}-ta [m]u-lah₅-he-eš₂
 複数の人物を PN が Agade から連れてきた。
- (97) Fish, *RA* 46/1, p. 53: BM 113010 [=Yoshikawa 1981: 316-317] l. 3-5 (Ur III 期)
 lu₂-ma₂-zi-ra-be₂-ne lugal-ku₃-zu ba-an-la-ah
 船を壊した人達は Lugalkuzu に連れていかれた。
- (98) *NG* 121: 8 (*TCL* V 6165) (Ur III 期)
 mu-na-an-la-ah
 彼が彼のところに複数の人物を連れてきた。
- (99) *NG* 202: 9 (*TCL* V 6168) (Ur III 期)
 / 複数の人物 / PN-e ib₂-lah₅-e
 PN が複数の人物を連れていく。
- (41) Michalowski, *LSUr* 446, 448 (lah₅ についての類例: *LSUr* 345) (前二千年紀)
 gu₂ ki-še₃ gal₂-la-bi ba-e-su₈-su₈-ge-eš kur₂-re ba-ab-lah₅-e-eš uru kur₂-še₃
 ba-e-re₇(DU:DU)-eš
 彼らは降伏して、立っていた。彼らは異国の人[?]に連れ去られた。……彼らは異国の町に行った。
- (100) Išme-Dagan A 343 [ETCSL 2. 5. 4. 1] (前二千年紀)
 sipad ku₃-zu un lah₄(DU:DU)-lah₄(DU:DU)-e-ga₂
 私は民を導く賢き羊飼いであり、

43) この例の翻字は *ITT* I に従う。

44) Ur III 期以前において lah₅ と lah₄ が同じテキストにあらわれる珍しい例で興味深い。使い分けには何らかの意味機能の違いが反映されている可能性もある。

(93)や(95)にみられるように、{lah}が他動性の高い動詞であるにも関わらず、自動詞的であるとされる ba- が用いられている。このような文が自動詞文であるか他動詞文であるかについては今後の課題としたい。{lah}については移動の対象が有生物である場合でも {eš} が後続しない例が散見される。

2 無生物の複数性を表示する {lah}

吉川 1979 が指摘するように同様の例で運ばれる対象が有生物ではなく、無生クラスに属する動物やものになると、その複数性に関与する {eš} はあらわれないことが多い。しかしながら、(104)、(105) のように運び手が複数の場合は {eš} があらわれる。この場合先に {sug} のところで述べたように、複数語基と複数接尾辞がそれぞれ別のもの、すなわち運ばれるものと運び手の複数性を表示する⁴⁵⁾。

(101) *Nik* I 161, i 1-ii 2 (類例: *Nik* I 161 v 6, *i*₃-**lah**₅) (初期王朝期)

1 udu-nita il₂ 1 udu-nita lugal-sa-šuš-gal [ga₂]-udu-ur₄-ra-ta udu-nig₂-ku₂-a e-ma-**lah**₅

一頭の雄羊を II が一頭の雄羊を Lugalšašušgal が毛刈りの小屋から肥育用に連れていった。

(102) *ITT* II 4396: 6-8 (類例: 同4436: 5, ba-**lah**₅-「a」¹; 4436: 8, mu-**lah**₅-a) (アッカド期)

/ 複数の羊 / GN₁-ta GN₂-še₃ PN *i*₃-**lah**₅

複数の羊を GN₁ から GN₂ に PN が連れていった。

(103) Yang Zhi, *Sargonic Inscription from Adab*, A661: 12 (アッカド期)

..... e₂-ur-^{kiš}gigir dumu lugal-ka-ke₄ ba-ab-**lah**₅-**he-eš**₂

(……が彼らによって?) PN₁ の息子, PN₂ の家に運ばれた。

(104) *MAD* 4 126, 1-5 [= Steinkeller 1979: 59] (アッカド期)

3 k[uš(?) u₈(?) GN PN₁ PN₂ 「x」-da mu-**lah**₄-**he-eš**₂

(複数の物を) PN₁ と PN₂ が持っていった。

(105) *TCS* I 196: 8-10 (Genouillac, Trouvaille 67) (Ur III期)

/ 複数の羊 / e₂-dur₅ lu₂-HAR-ka-eš₂ mu-**lah**₆(DU)-**la-he-eš**₂⁴⁶⁾

複数の羊を PN の小屋に、彼らは連れていった。

(106) *MVN* XIV, 176 Vs. 12, 5 (Ur III期)

/ 複数の牛 / e₂-gal-ta **la-ha**

45) 運ばれるものが単数扱いの例は次のようになる。Yang Zhi, *Sargonic Inscription from Adab*, A 652: 17 / 穀物, 複数の人物 / mu-tum₂-eš₂ 「複数の人物が穀物を運んだ。」

46) Steinkeller 1979: 59 は mu-DU^{la-he}-eš₂ と読み、lah_x(DU)の根拠の1つとしている。本稿でも lah の読みが妥当であると考えるが、時期的にまた行政経済文書という資料の種類から la-he が読みであるとの見方は支持できない。

宮殿から来た複数の牛

(107) *MVN XVI 733* Vs. 9-Rs. 1 (類例: *MVN XVI 687* Rs. 6; Hackman, *BIN* 5, 96 obv. 1-3 他など)

(Ur III期)

2 ud₅ 1 maš₂-nita₂ gir₃ še-er-ha-an e₂-gal-še₃ **la-ha**

二頭の雌ヤギ, 一頭の雄ヤギを「足」役の Šerhan が宮殿に連れてきて,

(108) *TCTI 2 L. 3484*: 6 (Ur III期)

/複数の雄ロバ/ ambar^{ki}-še₃ **lah₅**-e-dam

複数の雄ロバを Ambar に連れていくべきである。

(109) *NG 120a*: 6-7; 10-11; Fish, *Iraq* V, p. 168 (*BM* 105393) (類例: *NG 120b*: 27-28 [*TCL* V 6163]) (Ur III期)

/複数の家畜/ PN₁ igi-ensi₂-ka-še₃ mu-**lah₅** PN₂ u₃ PN₃ nibru^{ki}-še₃ **la-he-**
dam

PN₁ がエンシの前に複数の家畜を連れてきた。PN₂ と PN₃ がそれらをニブルへ連れていくべきである。

(110) *NG 138*: 13-14 (Ur III期)

udu-bi gab₂-us₂-bi ba-an-**la-ah** bi₂-in-du₁₁ udu gab₂-us₂-e ba-an-**la-ha**

その羊をその牧人が連れていったと言って, 牧人が連れていった羊を……

(111) Ur-Nammu 1. 1. 29 Col. vi' 6'-9' [Frayne, *RIME* 3/2] (Ur III期⁴⁷⁾)

^den-lil₂ lugal-mu nibru^{ki}-še₃ he₂-na-**lah₅**

私は我が主エンリル神のために(戦利品を)ニブルに持ってきた。

(112) *Gudea Cyl. B* vii 10-11 [Edzard, *RIME* 3/1] (Ur III期)

^{id}₂idigna ^{id}₂buranun^{ki}-bi-da he₂-gal₂ **lah₅(DU.DU)**-am₃

ティグリス川, ユーフラテス川に豊かさがもたらされる。

(113) Ur-Nammu A 87 [Flückiger-Hawker, *OBO* 166] (前二千年紀)

gud-du₇ maš₂-du₇ udu-niga en-na ab-**lah₅**-a⁴⁸⁾

連れてこられる限り(全て)の完全な雄牛, 完全な雄ヤギ, 太った雄羊を,

(114) *Inana et Ebih* 39; 98 [Attinger, *ZA* 88] (前二千年紀)

hur-sag-ga₂ me₃ ga-ba-**lah₅**⁴⁹⁾ šen-šen ga-ba-ab-mu₂-mu₂

私は山に戦いをもたらそう。私は争いをおこそう。

初期王朝期に他の複数語基が重複する例はみられないが, {lah} は(92)や(106)のように語基の一部の重複と考えられる例がみられる。

47) Ur III期に作成されたテキストの後期のコピーである。

48) Nippur 版では lah₄, Susa 版では lah₅ で表記される。

49) Attinger は DU.DU と翻字をする。

VI {se} 「生きる, いる」

ti 「生きる (単数)」に対応する複数語基で, se_{12} (SIG₇)と表記される。Vまでにみえてきた複数語基とは異なる点が多くみられる。まず他の複数語基のサインに対応する単数動詞のサインを並べて表記するのに対し, 全く別のサインを用いる。次に後期になると se_{12} 「生きる」は単数にも用いられる。第三に吉川 1979 が指摘するように, 三人称複数接尾辞 {eš} の後続が後期までみられない。

sig₇ と翻字をすることが多いが, 本稿では下記の理由から時期に関わらず se_{12} と表記する。Steinkeller, ASJ 7 (1985: 195) が初期王朝期とアッカド期のニップールのテキストで「生きる」という意味の {se} の代わりに še が用いられることを指摘している。これは MSL IV, OBGT I IX, 649-655 の記述からも支持される⁵⁰⁾。さらに後期テキストにおいて「緑の, 美しい」を意味する場合, SIG₇-ga とあらわれ, 多く g が後続するが, 「生きる」を意味する場合には g があらわれない傾向にある⁵¹⁾。(118)は欠損があるが, 「生きる」の場合 se, 色彩語の場合 sig の読みが示される。

(115) MSL XVI, p. 425, 194 (A V/3) [si-e] = [SIG₇] = a-ša₂-bu ša₂ MEŠ 「生きる(複数)」
MSL III p. 127 (S^b I 361) si-ig = SIG₇ = ar-qu 「緑黄色の」

複数語基の {se} は「生きる」という意味から, 動物以外の無生物に用いられることはない⁵²⁾。初期王朝期の行政経済文書では基本的に複数の場合は単数の ti ではなく, 複数語基 {se} が使われる。

50) se_{12} が異形態として še をとり, ti に対応することが示されている。 se_{12} と ti はともに単数, 複数に使われ, どちらの場合も三人称複数接尾辞 {eš} を伴う場合は複数と解される。

MSL IV, OBGT I IX, 649-655 (同661-664に類例)

me-a an-se ₁₁ (SIG ₇)	[a]-li ₂ -šu	where is he?
me-a an-še	a-li ₂ -šu	where is he?
me-a an-ti	[a ¹]-li ₂ -šu	where is he?
me-a an-x	a-li ₂ -šu	where is he?
me-a an-se ₁₁ (SIG ₇)-e[š]	a-li ₂ šu-nu	where are they?
me-a an-ti-eš	[a ¹]-li ₂ šu-nu	where are they?
me-a i ₃ -ti-eš	a-li ₂ šu-nu	where are they?

51) an-sig₇-ga 「青い空」, kiri₆-sig₇-ga 「緑の果樹園」, hur-sag-sig₇-ga 「緑の山」など。ELA 459: ur na-an-sig₇-sig₇-ge ur na-an-gun₃-gun₃ 「犬は黄色くてはならない。犬はただらではない。」また「生きる」以外の意味で g があらわれない用例として Ur III期以前の行政経済文書に草や葦を対象として動詞の SIG₇ が使われる。「刈る」と訳されることが多いが意味は確定していない。

52) 行政経済文書において sila-a SIG₇-a 「町にある」(SAT 2 309 他) という表現がみられる。この SIG₇ が無生物の複数性に関わる可能性がある。

1 有生物の複数性を表示する {se}

初期王朝期において se_{12} はつねに複数に対応する。初期王朝期からアッカド期にかけて多く共格の動詞接辞 $-da-$ とともにあらわれる。Ur III期の例はほとんどみられない。後期の文学作品になると { se } を伴う例がみられ、また { se } が単数に対しても用いられる⁵³⁾。自動詞文の動作主であれ、被使役者であれ、「生きる／いるもの」の複数性を表示する。

(116) *Nik* I 16: 5. 11-13 [*FAOS* 15/1 *Nik* 16: 5. 11-13] (初期王朝期)

／複数の女奴隷／ PN $dub-sar-da e-da-se_{12}$

複数の女奴隷が書記である PN のもとにいた。

(同テキスト 6. 3 に $e-da-ti$ が複数に対応する例がある。通常は $e-da-ti$ が単数に対応する。 $e-da-se_{12}$ の例は *Nik* I 16: R 10. 3-4, *TSA* 14 Rs. I 2-8 ほか, *STH* 1 の 18, 19, 20, 24, 25 など初期王朝期の行政経済文書に数多くみられる。)

(117) *ECTJ* 39 xiv 13-14 (*TMH* V 39) (アッカド期)

／複数の人物／ $a-ga-de_3^{ki}-a mu-še$

複数の人物が Agade にいた。

(118) *Lahar and Ashnan* 27-28 [*Alster and Vanstiphout, ASJ* 7(1987)] (前二千年紀)

$e_2-bi du_6-ku_3-ga lahar {}^d ašnan-bi mu-un-se_{12}-eš-am_3 eš_3-ninda-gu_7 dingir-re-e-ne-ka mi-ni-ib-ri-ri-ge-eš-am_3$

その(神々の)家、清い丘で、Lahar 神と Ašnan 神を神々は生かした (=創造した)。神々の食事の神殿で彼らは集まった。

(119) *Lahar and Ashnan* 38-40 [*Alster and Vanstiphout, ASJ* 7(1987)] (前二千年紀)

$a-a {}^d en-lil_2 lahar {}^d ašnan-bi-da-ke_4 du_6-ku_3-ga um-ma-da-an-se_{12}-eš-a du_6-ku_3-ta ga-am_3-ma-da-ra-ab-e_{11}-de_3-en-de_3-en$

父なる Enlil 神よ、Lahar 神と Ašnan 神が清らかな丘に生み出された／いるので、私たちは清らかな丘から彼らを出したい。

(120) *Gilgamesh, Enkidu and the nether world* 1. 27 (*UET* VI 58) [*ETCSL* 1. 8. 1. 4] (前二千年紀)

$a-a-gu_{10} u_3 ama-gu_{10} me-a se_{12}-[me]-[eš] igi bi_2-du_8-am_3$

「私の父と私の母はどこにいるのか？ あなたは見なかったか？」

(121) *Lugalbanda* I 62, 473 [*ETCSL* 1. 8. 2. 1] (前二千年紀)

62) $ur-sag-me-eš ki-en-gi-ra se_{12}-me-eš$

彼らは英雄である。彼らはシュメールに生きる。

53) (118)と同じ文学作品に単数形に対応する se_{11} もみられる。 $se_{12.g}$ であられ、注意が必要である。*Lahar and Ashnan* 2-3 [*Alster and Vanstiphout, ASJ* 7(1987)]: $u_4 an-ne_2 dingir {}^d a-nun-na im-tu-de_3-eš-a-ba mu {}^d ašnan nu-ub-bi-tu-da-aš nu-ub-da-an-se_{12-ga}$ 「Anunna の神々がアン神によって生みだされたとき、Ašnan 神(穀物)が生まれていなかったため、彼が彼らとともに存在せず、」

473) sag-ki-ne-ne igi-ne-ne an-usan₂ sig₇-ga-me-eš

彼らの額、彼らの目について、彼らは輝く?夕べである。

(122) Cooper, *Curse of Agade* 17 (前二千年紀)

ki ezem-ma un se₁₂-ge-de₃

祭りの場で人々が生きるべく

(121)ではSIG₇に-me-ešが後続する二箇所について、gの有無による意味の対照がみられる。ただし、(122)のように複数語基の場合にgがあらわれる例も少ないながらみられる。

2 無生物の複数性を表示する {se}

無生物の場合動物以外に使われることはない。共格の動詞接辞-daとともに用いられ、家畜が誰かのもとで管理されていることを表す。初期王朝期からアッカド期にかけて多くみられるが、Ur III期以降みられなくなる。

(123) *AWL* 103: I 1-II 4 (*Fö* 8)(初期王朝期)

/ヤギや羊/ geme₂-^dba-ba₆ dumu-kam mu-ne₂-na-ga-me sipad-da e-da-se₁₂

ヤギや羊は息子であるGemebabaのものである。それらは羊飼いMunenagameのもとにいた。

(124) *Nik* I 311: 2, 2-4 (*FAOS* 15/1 *Nik* 311)(初期王朝期)

/複数の動物/ gir₂-nun gub₃-kas₄-da e-da-se₁₂

複数の動物が御者のGirnunのもとにいた。

(この他同様の例が *RTC* 53; *TSA* 13; *STH* I 17, 25, 26, 27; *DP* 88; 98などに多数みられる。)

(125) *ECTJ* 81: 1-3 (*TMH* V 81)(初期王朝期末)

42 gud PN an-da-še

42頭の牛がPNのもとにいた。

{se}は他の複数語基と異なり、時期的にかなりその用法が変化したことがうかがえる。またSIG₇は意味が多い動詞であるが、少なくとも複数語基に関係する「生きる/いる」の意味で用いられるときは時期にかかわらず重複せず、「生きる/いるもの」の複数性を表示すると考えられる。後期テキストには(122)のように*marû* 標識{e}が後続する例がみられる。

おわりに

従来の一般的解釈では複数語基の複数性は絶対格名詞の複数性を示すとされる。しかしながら複数語基の複数性は絶対格か能格かという格によるものではなく、動詞ごとに定まった項に関与するものである。すなわち {durun}「座る」は「座すもの」、{sug}「立つ」は「立つもの」、{sub} {ere}「行く」は「行くもの」、{lah}「運ぶ」は「運ばれるもの」、{se}「生きる」は「生きるもの」の複数に関わる。これは複数語基がその動詞の内項の複数を表示するともいえる。複数語基が複数を表す項は動作者、被使役者、対象になりうるが、使役

者になることはない。この複数語基の複数性は三人称複数有生接尾辞の複数性とは異なる。なぜなら三人称複数有生接尾辞 {eš} と {ne} は動作主、被使役者だけでなく、使役者にも対応しうるからである⁵⁴⁾。この三人称複数接尾辞については、同じく動詞人称接辞と関係の深い動詞語基直前の名詞要素の問題とともに別の機会に詳しく論ずることにする。

また吉川 1979, Yoshikawa 1979: 302 では複数語基と有生性の関係について、主語の複数性にかかわる場合の {sug}「立つ」だけが関与的であるとしているが、これをシュメール語における「立つ」の意味的特徴であるとするると全ての複数語基について有生性は関与しないといえる。三人称複数接尾辞が有生物に対応するのに対し、複数語基は有生性に関与しない。この点でも複数語基と動詞接尾辞の複数性は異なるといえる。

複数語基の重複については、{lah}の語基の一部が重複される例を除くと、前二千年期以前に重複は基本的にみられない⁵⁵⁾。単一の複数語基と意味機能の違いはいまのところ明確ではない。動作の多回性やアスペクトが関わると考えられ、今後の検討課題として残る。

複数語基のアスペクトに関しては問題であるが、NBGTの記述をもとに、単純に {sub} を *marû*, {ere} を *hamtu* とする従来の見解には疑問の余地がある。{lah} が *marû* 標識 {e} をとり、*hamtu* と *marû* の両方のアスペクトで用いられることが確実である。さらに {e} があらわれる例は {durun} や {se} についても散見される。Ⅲの3節の文法テキストで {sub} について指摘したように、{sug} と {sub} についても {e} によってアスペクトを区別した可能性がある。{sub} が {e} の有無によって両アスペクト形式で用いられていたとすると、{ere} を *hamtu* とするのは難しい。この他に複数語基のアスペクトに関わる問題としては、少なくとも単数においては *hamtu* 形式が用いられる cohortative で用いられること、三人称複数接尾辞の {ne} が全く後続しないことがあげられる⁵⁶⁾。現段階で筆者は複数語基は基本的にアスペクトをもつ形式ではなく、*marû* 標識 {e} によってアスペクトを表示しえたと考えるが、判断にはさらなる考察が必要である。

54) 三人称複数接尾辞 {eš} と {ne} は複数語基と異なり、使役者の複数性を表示することも可能である。(53) に {eš} の例をあげたが、{ne} については次の例などがみられる。

◇Sladek, *Inana's Descent to the Netherworld* 353

sipad-de₃ gi-gid₂ gi-di-da igi-ni šu nu-mu-un-tag-ge-ne

彼らは羊飼 (Dumuzi 神) に彼女の目の前で *gigid* やフルートを吹かせなかった。

55) これは初期王朝からアッカド期の複数語基がサインを横に並べ、また Ur III 期は分かち書きであるという表記上の理由も関係するかもしれない。Ur III 期に šu₄ ({sug}) の重複がみられるが、これは šu₄ のサインが単数の場合と違うものであったため、重複が許容されやすかった可能性がある。

56) 複数語基に三人称複数有生接尾辞 {ne} が後続する唯一の例は次にみられる。

<i>ana ittiš</i> (MSL I) Tf. 2. II 19-22	<i>i₃-su₈-ge-eš</i>	<i>iz-zi-iz-zu</i>
	<i>i₃-su₈-ge-ne</i>	<i>iz-za-az-zu</i>
	<i>al-gub-bu-uš</i>	<i>iz-zi-zu</i> 。
	<i>al-su₈-ge-eš</i>	<i>iz-zi-zu</i>

最後に Ur III期以前の複数語基の表記法はそれぞれの時期において出土地による傾向がみられる。今後後期のもも含め、記述の対象としたいと考える。今回扱った複数語基の形式は次の通りになる。

	初期王朝期	アッカド期	UrIII期	前二千年期
{durun}	durun _x (TUŠ.TUŠ)	durun _x (TUŠ.TUŠ)	du ₂ -ru-un	TUŠ-ru.n ; TUŠ.n
{sug}	su _x (DU.DU).g	su _x (DU.DU).g?	š _u 4.g	su ₈ (DU : DU).g ; su ₈ (DU : DU)-ug ^a
{sub}	su _x (DU.DU).b ^b	D _U .D _U ? ^c	su _x (DU.DU).b?	su ₈ (DU : DU).b ; su ₈ (DU : DU)-ub ^a
{ere}	er _x (DU.DU)	D _U .D _U ? ^c	er, e.r	re ₇ (DU : DU) ; e-re ₇
{lah}	lah ₅ (DU.DU)	lah ₅ (DU.DU) lah ₄ (DU : DU)	lah ₅ (DU.DU) ? la-ah, la.h	lah ₅ (DU.DU) lah ₄ (DU : DU)
{se}	se ₁₂ /še	se ₁₂ /še	?	se ₁₂ /še

a : 後続要素のない場合にみられる。

b : 1例しか確認できていない。

c : {sub} {ere} {lah} の可能性があるが、後続子音がなく判断ができない。

〔追記〕 京都大学人文科学研究所教授である前川和也先生に多岐にわたり様々なご教示をいただいた。深く感謝する。

参考文献

- Attinger, P. (1993) *Éléments de linguistique sumérienne*. Vandenhoeck & Ruprecht. Göttingen.
- Black, J. A. (1991) *Sumerian Grammar in Babylonian Theory*. Editrice Pontificio Instituto Biblico. Roma.
- Krecher, J. (1967) Die pluralischen Verba für „gehen“ und „stehen“ im Sumerischen. *Die Welt des Orients* 4, 1-11
- Steinkeller, P. (1979) Notes on Sumerian Plural Verbs. *Orientalia NS* 48, 54-67.
- Thomsen, Marie-Louise (1984) *The Sumerian Language*. Akademisk Forlag. Copenhagen.
- Yoshikawa, M. (1979) Verbal Reduplication in Sumerian. *Acta Sumerologica Japan* 1, 99-119.
- Yoshikawa, M. (1981) Plural Expressions in Sumerian Verbs. *ASJ* 3, 111-124.
- 吉川 守 (1979) シュメール語の動詞における複数表現について 『オリエント学論集』 刀水書房, 679-700.

(京都大学大学院文学研究科)